

武蔵野 ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ

人道、博愛に基づく「赤十字」思想の発祥は、1859年、イタリア統一戦争までさかのぼります。ソルフェリーノの戦い（フランスのナポレオン三世軍、イタリアのサルデーニャ王国軍とオーストリアのフランツ・ヨーゼフ皇帝軍による戦い）で傷ついた兵士たちが打ち捨てられている悲惨な情景に、創設者アンリ・デュナンは、敵味方の差別なく傷病兵を救うこと、その具現化として救護を行う団体を各国に創設することを訴えました。それが現在世界191の国と地域に組織を持つ赤十字社です。アンリ・デュナンの構想から90年後の昭和24（1949）年。武蔵野市赤十字奉仕団は日本赤十字社の地域赤十字奉仕団として、都内で3番目に結成されました。戦後の世情のまだ安定していない時代に始まった奉仕活動は、武蔵野市の福祉の礎を築いたといっても過言ではありません。

武蔵野市 赤十字奉仕団

7月、70周年を迎えた武蔵野市赤十字奉仕団。昭和24年の結成以来、赤十字の「人道・博愛」の精神に基づきさまざまな奉仕活動を実践してきました。その活動はボランティア、地域福祉の先駆けとして、さまざまな取り組みを重ね、地域福祉の最前線で活躍しています。

昭和26年の「敬老会」



「お年寄りたちに寂しい
思いをさせてはいけない……」
の思いではじまった敬老会

地域赤十字奉仕団の活動は、高齢者支援、児童の健全育成活動、災害時の救護・救護・募金活動、防災活動、献血活動など多岐にわたりますが、武蔵野市赤十字奉仕団70年の歴史を振り返ると、さまざまな活動の中でも「敬老事業」と「愛のスープ事業」の2つが大きく浮かび上がってきます。武蔵野市赤十字奉仕団の特色を色濃くあらわしているこの2つの取り組みを柱に、70年を振り返ってみましょう。

昭和25年に75歳以上の方を対象にした初めての「敬老会」が、小学校地区単位で行われました。当時の記録によると、「10月19日境分団では貸切バスで参加者60名を乗せて開催中の井の頭自然文化園の動物祭に招待（中略）、続

取材・文 山口朋恵

いて25日には第五小学校裁縫室において日赤奉仕団のいろいろな余興があって老人達をねぎらう」とあり、趣向を凝らした敬老会が分団ごとに行われていたことがわかります。発足当時は第1〜6の分団があり、記述の境分団は第6分団。分団は昭和54（1979）年には13を数えるまでとなり、武蔵野市全域をカバーします。全市を網羅する町会・自治会組織を持たない武蔵野市にとって武蔵野市赤十字奉仕団の分団は、町会・自治会の役割を担っていた面もあると言えます。ちなみにこの年、女性による奉仕団という規定であったのが男性の入団も可能となりました。

さて敬老会のスタートについて特筆すべきは、事業にかかる活動資金を、団員たちが物を売ったり、廃品回収をしたりして捻出していたことです。こうした団員たちのボランティア精神に

支えられた、手作りによる敬老会は昭和39（1964）年まで続き、40年からは市に引き継がれ「敬老福祉の集い」として開催されることとなります。

全国の配食サービスの先駆けとなった

「愛のスープ」事業

高齢者向けの配食サービスは今までこそ珍しくありませんが、行政に先駆けてそれを始めたのが武蔵野市赤十字奉仕団です。一人暮らしの高齢者の増加に伴い、当時の後藤喜八郎市長の要請



昭和時代の敬老会

のもと、市のバックアップを得て昭和46（1971）年に「愛のスープ事業」を開始しました。この事業は週1回程度、団員らが作った家庭料理を1人暮らしの高齢者宅へ届けるというものです。時には団員宅に招いたり、下着など必要なものを届けたりするなど、高齢者が孤独に陥ることのないよう、社会的な触れ合いを図ることも目的としたものでした。

この事業は全国的に話題となり、2年後の昭和48（1973）年には事業を市へ移管し、行政のもとの配食サービスへと大きく発展します。さらには昭和56（1981）年、赤十字奉仕団としては全国で初めて、社会福祉の増進に優れた業績をあげた者に授与される「藍綬褒章」を受けました。

「高齢者福祉に寄与する事業は現在も受け継がれ、9月の『友愛訪問』、10月の『敬老福祉の集い』のお手伝いは私たちの大切な活動のひとつです」とは、武蔵野市赤十字奉仕団委員長の松井浩子さん。高齢者のお宅を一軒一軒訪ねる友愛訪問は平成12（2000）年にスタート。「敬老福祉の集い」の案内やお祝い品を届けるだけでなく、見守り、安否確認の意味も持っています。



藍綬褒章の賞状



藍綬褒章受彰を祝う会

東日本大震災を経て 赤十字奉仕団の 役割を再認識

昭和33（1958）年、市内730戸の浸水被害があった台風22号（狩野川台風）の時に炊き出し活動を行って以来、各地で地震などの災害が起こるたびに街頭募金を行うなど、武蔵野市赤十字奉仕団では災害救護に対する奉仕活動を行ってきました。そして平成23

（2011）年に起こった東日本大震災。東北地方を襲ったこの大災害は、改めて赤十字奉仕団としての役割を考える機会になったと松井委員長は言います。「災害が起こった時に私たちに何ができるか。いざという時に力を発揮できるように、災害・防災活動には特に力を入れるようになりました」。「帰宅困難者対策訓練」や「総合防災訓練」などに参加するとともに、団員たちのスキル向上を目指して「短期救急法講習会」を行い、災害時の高齢者支援の研修、ハイゼックス（耐熱に優れたビニール袋）やカセットコンロを使った調理方法の会得、携帯トイレの普及など災害時に生きる知識の蓄積に努めています。

現在の団員数は約600名。これは都内でも多いほうで、武蔵野市赤十字奉仕団の活発な活動を物語っています。その一方で若い世代の団員の獲得が難しいという現実もあります。「志を高く持った先輩たちに導かれて、現在の武蔵野市赤十字奉仕団があります。これを次世代へつなぎ、新しい感性で時代に合った活動をしていってほしい」と松井委員長。戦後から平成という時代を経て、変わらぬ人道・博愛の実践は令和へと引き継がれていきます。